

# 経営リースの取組事例

## 「埼玉県内における畜産環境リース事例」

社団法人埼玉県畜産会 経営支援部指導課 金子 修

### ◆埼玉県の概要及び畜産の現状

埼玉県は関東平野の内陸県で、全域が都心から100km圏内に位置している。面積はおよそ3800km<sup>2</sup>で、この広さは国土の約100分の1に当たり、全国で39番目の大きさとなっている。また、山地がおよそ3分の1、残りの3分の2を平地が占めている。

主な河川は、秩父山系を源とする荒川と、“坂東太郎”の異名を持つ利根川である。

気候は、夏は蒸し暑く、冬は乾燥した「カラッ風」が吹く日が多いのが特徴で、風水害は比較的少ない一方、全国的に見ても快晴日数が多く、暮らしやすい気候となっている。

さて、本県では、生産地と消費地が隣接すると

いう、恵まれた立地条件を活かし、多彩な農業が営まれ、全国に誇れる多くの農畜産物が生産されている。

特に畜産については、野菜、米に次ぐ本県の基幹的農業分野となっており、産出額は333億円（平成17年）と農業全体の17.2%を占めている。

しかし、近年、都市化の進展による環境問題等の発生から、生産者は年々減少しているのが実情であり、今後本県の畜産が安定的に発展するためには、地域社会に配慮した経営展開が求められている。

そこで今回は、1/2補助付きリース事業により家畜排せつ物の処理施設を整備し、家畜排せつ物を良質な土づくりのために有効活用している、県内の二つの事例について紹介する。



図 埼玉県及び騎西町・神川町

## ◆塩崎博氏（騎西町）の例（写真1～4）

本県北東部に位置する北埼玉地域は、畜産の中でも養豚業が盛んであり、この地域の騎西町で塩崎博氏は、肥育豚換算約600頭規模の一貫経営を展開している。



写真1 密閉型発酵機

整を行っていたが、完全に分解されないなど苦慮されたようである。現在は、水分調整にモミガラを使用しており、発酵状態も良いことから、他の添加物は一切使用していないとのことである。さらに、出来上がった堆肥の取り扱いやすさもあり、昨年度に



写真2 製品堆肥詰め袋



写真3 汚水浄化処理施設



写真4 塩崎博氏（左）と後継者

塩崎氏は、従来より環境に配慮した経営を行ってきた方であり、スノコ豚舎から排出されたスラリーのうち、固形分については自己施工により整備した堆肥舎により、尿・汚水については貯留槽によりそれぞれ堆肥及び液肥化してきたところである。

しかし、堆肥舎が老朽化したことに加え、周辺への臭気に対する配慮が求められるようになり、また液肥還元地の確保も困難になってきた。

そこで、平成11年度に密閉型発酵機を、平成16年度に汚水浄化処理施設をそれぞれ1/2補助付きリース事業により整備したところである。

従来の堆肥舎を使用していた頃はオガクズで水分調

は当会で開催した「堆肥共進会」で最優秀賞を受賞されたところである。

また、堆肥の用途については、近隣の家庭菜園及びナシ・キュウリ農家への販売が約8割程度を占めており、自作地での使用及び袋詰め(15kg)による農協への販売がそれぞれ1割となっている。運搬・散布については利用者が各自行っており、販売価格も四季によりかなり差があるが、順調に利用されている。

なお、堆肥化処理過程での脱臭については、オガクズ、炭など複数試したとのことだが、現在はステンレス水槽に臭気を送り込み、酸化チタン及び光触媒で処理している。

次に、汚水については、ふん尿混合汚水を固液分離した後、回分式曝気槽により浄化処理している。年数回の水質検査においてもBOD・SSなどの値は、県の環境保全条例基準をクリアしている。

さらに、曝気処理後ろ床から取り出した汚泥と近隣の稲作農家から発生する米ぬかを混合し、前述の堆肥舎で堆肥化し、自身のほ場で春野菜への施用について実験を行っている。施設整備後もなお、豚ふん尿の利活用の研究に余念がない姿勢が大変印象的である。

#### ◆福嶋志信氏（神川町）の例（写真5～8）

本県北部、群馬県境沿いの利根川と神流川に囲まれた児玉地域では、古くから米麦の二毛作を基幹に、施設や露地の野菜、畜産、果樹など多様な農業生産が営まれている。中でも、神川町における平成17年の畜産産出額は、12億4千万円と県内第4位となっている

（合併前の神泉村を含む）。

福嶋志信氏は、同町内で乳用牛60頭を飼養しており、低温殺菌牛乳の原料となる高品質な生乳を生産している。また、育成牛については、県営の「秩父高原牧場」に預託するなど、効率的な経営を展開している。

牛舎から排出されるふん尿は、流下式の地下槽に貯留される。以前はこのふん尿混合物（スラリー）を自身で所有する粗飼料のほ場へ還元していたが、住宅地に隣接するほ場も多く、臭気の問題から、年々ほ場還元することが難しくなっていた。また、当時（平成16年）は家畜排せつ物法の完全施行が迫っていたこともあり、同年度の1/2補助付きリース事業で堆肥化施設を整備することになった。機種選定に当たっては、地元の酪農組織を始め、地元の畜産農家の事例を参考に情報を収集し、作業の効率性、堆肥の出来具合及びコスト面等を総合的に検討した結果、発酵舎を選択した。



写真5 清潔で風通しの良い牛舎



写真6 発酵舎と自己資金で整備の製品置き場（右端）



写真7 攪拌の様子



写真8 福嶋志信氏

流下槽からのふん尿の汲み上げは毎日行っており、発酵舎へ搬出した後、戻し堆肥と道路や河川等で刈り取った草木のチップを副資材として攪拌機で混ぜ合わせている。ふん尿を一括して処理するため、稼働当初は水分調整に苦勞し、副資材の配合量も自身で何通りも試された。なお、発酵促進剤などの他の添加物は一切使用していない。

完成した堆肥は主に町内の家庭菜園用に販売されている。口コミによって利用者も順調に増え、現在では製品置き場（自己資金にて発酵舎の隣に整備）の堆肥が空になり、新たに堆肥が出来上がるまで申込者に待っていただく時期もあるほどである。さらに3tトラックによる運搬も有料で行っている。

なお、前述の草木のチップは子牛用の敷き料としても利用している。また、牛舎はこまめな除ふんにより清潔に保たれており、送風機を多く設置しているため風通しが良く、牛ふんの乾きもよい。さらに牧草等の飼料や機械などの置き場なども整頓されており、福嶋

氏の日頃からの丁寧な仕事を伺うことができる。

## ◆最後に

冒頭にも触れたように、本県の畜産は都市化による住宅地と混在化した地域での経営事例が多く、環境に対する配慮がより一層求められている。

しかしながら、700万県民を始めとした首都圏住民に、新鮮で安全な畜産物を供給する重要な役割も担っていることも事実である。

したがって、環境対策はもちろんのことであるが、近隣の耕種農家と連携して良質な堆肥を提供したり、家畜とのふれあいなどの体験学習の場を提供するなど、様々な取組により、地域に根ざした経営が求められている。

今回の取材では、いずれの生産者もそれぞれ工夫を凝らした方法により、地域に根ざした経営を展開しており、今まさに求められている経営事例であることを痛感した。

